といった国の医学史にも広がっている．本書を繙くならば，こうした新しい成果の登場が一目瞭然であろう．

まさにこうした研究の進展が1990年代以降の研究成果をまとめる要請を生じさせたのであり，本書はこうした需要にこたえたものにほかならない．本書の登場により，こうした重要な転換期から今日にかけての成果を容易に検索できるようになったのであり，それは単に新しい文献を収録したにとどまらない，重要な貢献といえるだろう．すでに触れたように，本書では，中国国内で発表された論文・著書のみならず，研究プロジェクトや海外の成果を翻訳したものまでが収録されている．すなわち，20世紀以降における中国大陸・香港・台湾における医学史の研究史，研究動向を把握するうえで，本書ほど的確なものはないであろう．

以上が本書の大まかな内容と評者が感じた本書の魅力である．今後，本書がさらに多くの医学史研究に関心を持つ人々に利用され，そこから多くの意義が見いだされることを心から願う．

（向　　静静）

［北京：人民出版社，2020年12月，A4判，2,258頁，698元］

青木歳幸，W・ミヒェル 編
『天然痘との闘いⅡ【西日本の種痘】』

青木歳幸氏を代表とする科学研究「我が国種痘伝播と地域医療の近代化に関する史料集成を軸とする基礎的研究」の成果が【西日本の種痘】として取り纏められた本書を紹介する．2018年発刊された『天然痘との闘い【九州の種痘】』については鈴木友和氏による書評が本雑誌第65巻1号に掲載されている．それに継続した研究の成果が次の目次により編まれている．

序章　西日本の種痘　青木歳幸
総論
1. 牛痘導入の黎明期におけるゴルトシュミット著『牛痘と種痘の慨史』の受容　W・ミヒェル
2. 上方蘭学の草分け吉雄元吉　W・ミヒェル
各論
1. 長州藩と山口県の種痘　中澤　淳
2. 松江藩における種痘の始まり—松平家文書を中心として—　梶谷光弘
3. 鳥取藩地域への牛痘苗伝来と普及　海原　亮
4. 広島藩領の種痘　青木歳幸
5. 備前・備中の種痘　木下　浩
6. 岡山における種痘の「終わり」—明治初期在村医の種痘活動—　松村紀明
7. 伊予の種痘　井上　淳
　コラム1　讃岐の種痘医たち　青木歳幸
8. 阿波の種痘　古西義麿
9. 土佐の種痘　古西義麿
10. 大阪除痘館と備中足守藩除痘館—緒方洪庵開設による足守除痘館の基本性格をめぐって—　浅井允晶
　コラム2　官許された大阪除痘館　川上　潤
　コラム3　京都有信堂の種痘　有坂道子
11. 近江の種痘　古西義麿
　コラム4　牛化人痘苗の作出と小山肆成　浅井允晶

加えて青木歳幸・田中美穂・木下浩の各氏による史料編が掲載されている．

先行する【九州の種痘】から編者を務めているW・ミヒェル氏の総論により，江戸時代中期の日本に於いて人痘種痘の知識や経験が，日本の牛痘種痘の迅速な日本各地への伝播における基盤として江戸の幕藩体制の中で共有されていたことがよくわかる．前書を含めて，ミヒェル氏が多く書かれているH.G.ゴルドシュミットの1801年発表の『牛痘と種痘の歴史』（オランダ語版）が日本における種痘導入にあたり多くの蘭学者により翻訳されて

いたことに注目させられた．ミヒェル氏の記述を引用しておく．

「19世紀中頃の日本の状況は，王立ジェンナー協会が誕生した19世紀初頭のヨーロッパの状況に大変似通っている．人痘接種はある程度認められるようになったが，その安全性に対する不安を拭えない人々が相変わらず多かった．また，牛の病気を植え付ける前代未聞の新しい手法に疑いを抱くのも当然だった」【九州の種痘】
「シーボルトは，日本の牛痘導入に自身が果たした役割を過大に評価していた」
「シーボルトは江戸の「宮廷侍医たち」に牛痘について説明し，子供三人に種痘を行った．自著『Nippon』では，持参した痘漿はすでに不活化したと言いながら，「ただ種痘の術式を示すために」実施したと説明している」
「シーボルトは伯父あての書簡で，自分が牛痘術を日本に導入したのだと自負しているが，江戸から長崎に戻ってから，新たな種痘を実施した形跡はない．痘漿はヨーロッパから東南アジアやアメリカまで伝わっていたにも関わらず，バタヴィアから日本までの移送問題はなぜ解決できなかったのだろうか」【西日本の種痘】

このような新たな研究課題も提示されている．

また各論では各論者の得意な地方の研究から，それぞれの地域の特殊性や藩との関わりだけではない，医人の交流と，それを受け入れていった人々の苦労がよくわかる論考が並んでいる．

この時代の研究者でない者としてはそれぞれに対して，論評を加える力はないが，上記の目次の紹介をして，諸氏の論文にあたられる方が増えることを期待する．青木氏が前書の『あとがき』にてのべているように，本研究は引きつづき東日本・北海道まで続くとのことであり，その成果を楽しみにしたい．本書の『あとがき』にあるように世界的なコロナウイルスのパンデミックの中で，このような集学的な研究を取りまとめられたことに感謝するとともに，種痘の伝播が西国に比べやや遅れたように思われている東国についての研究成果が上がることを期待したい．

日本における種痘史の研究は相当に深く厚いものがあることは事実であるが，このような形の成書にまとめられつつあることに期待をしている．

（渡部　幹夫）

［岩田書院，〒157-0062 東京都世田谷区南烏山4-25-6-103，TEL. 03（3326）3757，2021年3月，A5判，381頁，8,000円＋税］

泉　孝英 編
『日本近現代医学人名事典　別冊』

本書は，第115回日本医史学会において第26回矢数医史学賞を授与された『日本近現代医学人名事典』の別冊として刊行された．日本の医史学研究において単行書として最も高く評価された著作に対して贈られる矢数医史学賞受賞作である前著の書評をなすという栄に浴してからはや9年が過ぎた．いままたその別冊として前著に所載ができなかった人物を増補しさらに前著の正誤や補足まで掲載した本書を評することができる喜びは格別である．年齢を云々することは学術の世界にあっては慎まねばならないとしても，本年で85歳を迎える著者がその浩瀚さにおいて並ぶものがないといえる前著を9年の年月を経て，さらに増補・正誤の訂正を行って一書となしたその学問に賭ける熱意と精力にまずは深甚なる敬意を払わねばならない．本書が世に出たことを学界に身を置く者として同慶の念を抱かずにはおれない．

前著の拙評において，評者はそれが日本近現代医学史研究の必備書であるとともに，その利便性に比して業績としての評価は必ずしも正当に評価されないことも少なくないと論じた．しかしながら，こと本書に関していえば，それが妄言であったことを反省した．それは，その後直接医史学を専門としない研究者の中でも前著の存在が知られ